

津田学園中学校 2年 加藤 里緒菜「新しいおもてなしの形」

三重県が誕生して百五十年。この長い歴史の中で、三重県は常に「人を迎え入れる場所」であり続けてきた。私は隣の愛知県に住んでいるが、家族旅行で伊勢神宮や志摩の海を訪れるたび、この地にある温かさに触れてきた。かつて「お伊勢参り」の旅人を全国から温かく迎えた文化があるように、この伝統的な「もてなしの精神」こそが、これからの三重県にとって最も大切な宝物である。そこで私は単なる観光地としてではなく、人々の心が通い合う「世界一のおもてなし県」にしていきたいと考えている。

私が理想とするのは、言葉の壁や身体的な不自由に関わらず、訪れる人が「自分の居場所がここにある」と感じられる場所だ。その実現のために、古くから伝わる温かさと最新技術を組み合わせた「新しいおもてなしの形」を創っていきたい。例えば多言語対応の AI や AR 技術を使えば、伊勢志摩の自然や伊賀の忍者文化を、より深く世界中の人に伝えることができる。しかし、技術はあくまで道具だ。本当に大切なのは、道具を使って「何を届けるか」という目的である。以前、三重県のお店を訪れた際、店員さんが「ゆっくりしていてね」と声をかけてくれたことがあった。その一言で、旅の疲れが吹き飛び、心が軽くなったのを覚えている。こうした「想いが伝わる交流」こそが、訪れる人にとって最高の思い出になるのだ。最新技術は、こうした人の優しさや魅力を、より多くの人に届ける助けになると私は信じている。

そのためには、まず私たちが三重県の素敵なところをさらに知って、自分たちらしい感性で、デジタルの力を借りながら発信していくことが重要だ。百五十年という節目を、伝統を守りつつ新しい一歩を踏み出すチャンスにしたい。最新の便利さと、人が寄り添う伝統的な温もりが共存する三重県を、私は皆とともに築いていきたい。